



が魅力のひとつでしょう。

— 本企画展のテーマとなる「歌川派」。その開祖・歌川豊春とはどのような人物ですか？

歌川豊春は、近年の研究で大分県臼杵市出身であることが提唱されていますが、まだまだ謎が多い人物。ただ、一部の史料には、豊春は大名家に出入りした絵師だったという記録が残っており、その証拠に、豊春は肉筆画を数十点規模で残しています。オーダメイドの肉筆画がたくさんあると言っているのは、豊春宛に絵の依頼がたくさん来ていたこと、そして常連の注文主がいたことが想像できます。

また、豊春が活躍した江戸時代中期は「浮世絵」といえば「美人画」「役者絵」の2種類が主流。しかし彼は珍

しく、「名所絵(風景画)」も多数手掛けています。今回の展覧会では「江戸名所新吉原之図」など、豊春の名所絵も出品されるので、彼の腕前をお見逃しなく。

— 「歌川派」は豊春以降どうなったのでしょうか？

「歌川派」は浮世絵界最大の画派として隆盛します。開祖・豊春の意志を継いだ2代目・歌川豊国は浮世絵の2大テーマである「美人画」と「役者絵」で大ヒットし、歌川派の名前を江戸中に轟かせました。その後は「名所絵」の広重や、「武者絵」の国芳など、「歌川派」は何世代にもわたって、売れる絵師を輩出し続けました。さっき言った通り、浮世絵師は売れなければ次の仕事がありませんから、ここまで安定して売れ続けた「歌川派」は、絵師がどうこうというより、歌川派だから購入する、というファンが一定数いた、浮世絵師のブランドだったのでしょうか。そのため多くの弟子が入門し、最大画派となったのです。

— 本展をどんな人に見てもらいたと思いますか？

まず、歌川豊春を知らなかった人にはぜひ見てもらいたいです。代表的な浮世絵師と言えは、葛飾北斎や広重など、江戸後期の版画で知られた絵師が挙げられがち。そのため浮世絵ファンの間でも、豊春の知名度は低いですよね。なので、本展をきっかけに豊春の存在、ひいては彼の肉筆画の秀品が、地元大分から日本中に広まればと思います。

また、本展は豊春から国芳、広重まで、歌川派の最初期から晩期まで網羅。さらに歌川派のライバルであった北斎や喜多川歌麿ら、有名どころの絵師の作品も展示されます。浮世絵の展覧会を初めて鑑賞するという人も親しみやすいはず。肩の力を抜いて、江戸のサブカルチャーを楽しんでみてはいかがでしょうか。

「歌川派」が築きあげた 江戸のサブカルチャーとしての 浮世絵

The Ukiyo-e



2019年9月より、企画展「江戸浮世絵の黄金時代 The Ukiyo-e 歌川派—豊春から国芳、広重まで」が開催されます。そこで、浮世絵の魅力や本展のテーマである歌川派について、浮世絵を専門とする慶応義塾大学の内藤正人先生にその魅力を語っていただきました。



慶応義塾大学文学部教授
国際浮世絵学会常任理事
内藤正人

— 内藤先生と浮世絵の出会いについて教えてください。

初めての出会いは、小学生の時に版画を見たことですね。版画は今で言うところのポスターですから、一般家庭にも残っていることが多く、身近な存在でした。それから中学生になった頃、幕末の版画集を見て、美術史という学問に出会いました。僕はその頃、古生物の研究をしたかったのですが、どうも数学ができず、第二希望の美術史の道へ。現在は浮世絵の歴史研究はもちろん、教育普及活動もしています。

— そもそも浮世絵とはどのようなアートでしょうか？ またその魅力はなんですか？

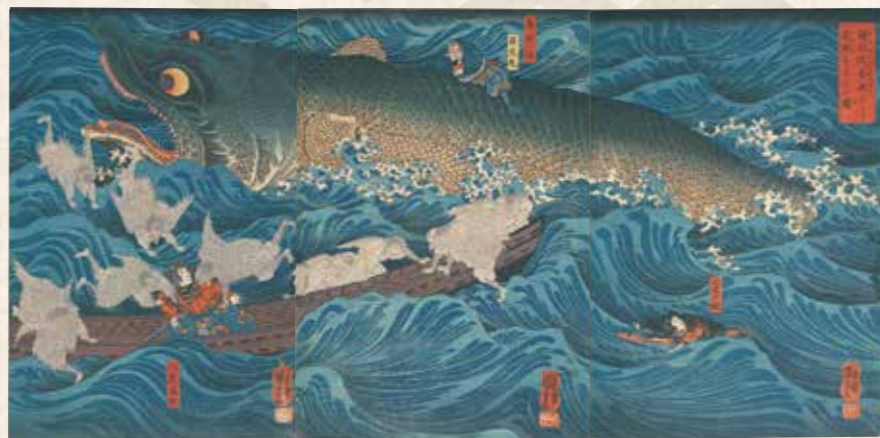
まず、「浮世絵＝版画」だと思っ人が多いですが、それは大きな間違い。浮世絵とは文字通り、浮世を表した絵、世相をモチーフにした絵のことです。菱川師宣の「見返り美人図」は、「肉筆画」と言って絵師が直筆した一点物の絵画ですが、モチーフは当時流行っていた美人画なので、立派な浮世絵。同時期に、浮世絵が木版画として大量印刷され、安価な浮世絵版画が庶民でも手に入るようになりました。このように、浮世絵にはオーダメイドの肉筆画と、誰でもゲットできるような大量印刷された版画があるわけです。今回の企画展では、よく見る版画の浮世絵だけでなく、肉筆画の浮世絵も展示されるので注目してほしいですね。

それを踏まえて言うならば、肉筆画の得意な浮世絵師とは、熱心なファンやパトロンを抱えた絵師であり、他方で版画を得意とする絵師とは、広く一般大衆を相手に仕事をする漫画家、イラストレーターのような存在です。その時代、安定した地位や収入を得られる安定的なパトロンを抱えた一部の特別な絵師に対し、浮世絵師は売れなければ次の仕事を得られない、連載物でもシリーズ打ち切りになるシビアな業態です。逆に言えば、今もたくさん残っている浮世絵版画は、たくさん印刷された。当時の売れ筋人気作品ってこと。なかでも、今で言うところのアイドルのプロマイドである「美人画」や、人気の歌舞伎役者を描いた「役者絵」は、庶民の間で特に人気のテーマだったので、作例もたくさん残っています。これほど庶民のニーズが反映されている浮世絵はまさに「江戸のサブカルチャー」で、セレブをターゲットにした「ハイ・アート」とは異なり、肩の力を抜いて楽しめる庶民のための「ロウ・アート」であること

Data
江戸浮世絵の黄金時代
The Ukiyo-e 歌川派
—豊春から国芳、広重まで

9/20(金)～10/27(日)
【前期】9/20～10/6、【後期】10/8～10/27
▶大分県立美術館 3階 展示室B

【時間】9:00～19:00 (入場は閉館の30分前まで) ※初日の一般入場は10:00から、金・土曜は20:00まで開館
【休展日】10/7(月) 【料金】一般800円(600円) / 大学・高校生 500円(300円) ※ () 内は前売および20名以上の団体料金、中学生以下無料
【問】大分県立美術館 Tel:097-533-4500



歌川国芳《讃岐院眷属をして為朝をすくふ図》1850-52(嘉永3-5)年 山口県立萩美術館・浦上記念館 前期展示



歌川広重《名所江戸百景 亀戸梅屋敷》
島根県立美術館 前期展示



歌川豊春《観梅図》江戸時代 大分県立美術館 全期間展示

浮世絵について、
もっと詳しく知りたい方へ
おすすめ

内藤正人著
江戸の人気浮世絵師
俗とアートを究めた15人
(幻冬舎新書271、定価940円＋税)

15人の浮世絵師の功績を通じて、浮世絵の歴史を解説する入門書。歌川派からは豊国・広重・国芳が登場。

内藤正人著
うき世と浮世絵
(東京大学出版会、定価3200円＋税)

「うき世」ということばの歴史的検証から、浮世絵とサブカルチャーの蜜月までを説く。21世紀の新たな浮世絵観が提示される。